
ディブレイカー～秕木家の事情～

五十嵐レンタロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイブレイカー～秕木家の事情～

【NZコード】

N1821Y

【作者名】

五十嵐レンタロウ

【あらすじ】

この小説はEエブリスタで自分、五十嵐恋太郎が書いている『秕木姉弟の異世界事情』を加筆修正しながら重複で投稿しています。

十に別れた大地を持つ世界　　十戒世界。

かつて、その全ての世界が、荒ぶる戦火の中にあった。

そして、かるうじて結ばれた停戦条約から十年……最下層の世界M・G 地球で個性派の姉達に囮まれて、奮闘する平凡な高校生『秕木遠夜』。

だが、裏の顔は異本使いとしての能力をその身に宿し、魔と戦う騎士である姉達と対立しながらも、異世界からの犯罪者を狩るハンターハンター『黎明』^{デイブレイカ}として漆黒の夜を駆ける。

改変をしながら、試行錯誤を繰り返し、アップアップ頑張つてます。

ド素人丸出しの小説、楽しんで頂けたなら幸いです。

痛快娯楽ファンタジー開幕！

プロローグ

そこは、惨劇の残り香で満ちていた。

散らばつた大量の死体。

炎にまみれる瓦礫が大地を照らし、赤く染める。

深緑に包まれた簡素な山村は、一転して腐臭と血臭が充満した地獄と化した。

その真ん中で、一人。小さな矮躯の影がポツポツと力無い足取りで悪魔の原を練り歩く。

艶のあつた黒髪は泥で汚れ、子供向けアニメのキャラクターがプリントされたパークターは所々焦げ付き、瑞々しく幼さが残る顔は血色を失い、枯れ木のような土氣色になっていた。輝いていた純粋な瞳には生気が抜け切つて虚空を見るかのようだ。

煤で汚れた玩具のような小さな靴で力無く、憔悴しきつた体を引き摺るようにさまよい。

もうもうと昇る黒煙が月と星の光を遮り、空をにび色に染める。

見馴れた世界と完全に変わつてしまつた風景に頭がついていけず、ただ啞然とするしかなかつた。

視線の先に会つたのは村の診療所だつた場所。

火の手が上がり、焼け焦げて黒ずんだ屋根。

ボロボロに碎かれた外壁。

古い山村には珍しい、白い西洋式の綺麗だった家屋は変わり果てた姿を見せた。

強い臭気に頭が眩み、足を半歩引く。

ペキッ。

踵が何かを踏んだ。

だが、足元を見ようとすると首が思つように動かない。

頭にこびりついた恐怖が頭からの指令を寸断して、身体が言つようと聞かない。

肺が脈を打つように荒い息を吐かせる。

石膏のように固まつた身体に鞭打ち、無理矢理従わせる。

ギリギリと鋸びた車輪のように滑りの悪い首を、捻切る勢いで首を横に振り、下を向く。

瞬間、息が凍りついた。足の下には 肉塊が転がっていた。

顎から股下までの身体の前の部位がじっそり抉られ、その肉片が周りに四散していた。

胸と腹が消失し、ぐぢやぐぢやの臓器と中の内容物が剥き出しにな

つて いる。

踏んだのは砕けた肋骨の一部だろう。

縛り付けられたように、死体の顔の上半分を凝視する。

知つている人間だった。

よくしてくれた、商店の跡取り息子。

頼りなさそだつたけど、人好きにさせる笑いをする人だった。

だが、それは前までの話。

ただ、腐敗して土に帰るだけが未来の、肉塊の集まり。

死体じやない。

人の死に方じやない。

人の尊厳も何も無い。

口の中に桑のような物を突っ込まれて、そのまま降り降ろす。

まるで、子供が粘土で面白い形を作つて遊ぶよつた、無邪氣で、残酷な死。

「ヒツ……」

顔を上げて、散らばる“元”人達を見る。

頭頂から腹まで切り裂かれた友達の母親。

胴を横に両断された 診療所の医者。

顔を抉られた学校の先生。

それらの肉塊は十にも満たない少年の心を完膚無きまでに破壊するには充分過ぎた。

口の中に鉄臭い苦味を感じた。

口元から垂れる血。

胸を触るとべちゃりとした生暖かい感触が手に伝わり、手の平にべつとりと張り付いた赤い液体を凝視する。

血臭を孕む強烈な地獄の中では、少年の神経は痛みを忘れるほどに磨耗する。

致命傷を負った体で動き回る事の結果がどうなるかを予想する想像力も、その結果を教え少年を止める周りの大人も、今の少年には無かつた。

胸に火箸を突っ込まれたような痛みが、少年を咳き込ませる。

地に膝を付き、口から血が勢い良く飛び出した。

少年はそのまま地に伏し、倒れ込む。

自分も他のみんなと同じ、肉塊になるのか。

死という概念は触りだけは知っていたが、少年はそれを自分の存在する世界の外側の話だと思っていた。

だんだんと世界が霞がかつていく。

力の抜けた四肢から少しずつ感覚が薄れて行く。

死神が少年の頭上で迫り来る一瞬をまだか、まだかと心待ちにして大鎌を振り上げていた。

その時を刻むかのように、重力に従つて少年の血が歪な円を描くようになんで少年を中心にして伏した地面に広がる。

少年は昔、路上に咲いた花を摘もうと手を伸ばして、母に止められた事がある。

母は柔らかい口調で語つた。

命あるは全て、与えられた死があるの。だから、人の勝手でそれを決めてはいけないわ

新雪のような白い肌と優しげな面持ちが特徴的だったが、その時の声音と囁つきはシャツキリとしていた。

「母さん……」

今が、自分の『えられた死の時なのか。

そう問うかのよつなか細い声は、無情にも母の元には届かず静寂に呑まれて消える。

だんだんと弱く、感覚が長くなつて行く心臓の鼓動。血の抜ける感覚が体を支配する。

「母……さん……！」

必死に振り絞つて紡いだ、最後に一回会いたいと少年が願う最愛の人。

血溜まりに沈む少年の命が吹き消されようとした

「命を簡単に捨ててはいけないな。少年」

それに割つて入るよつて軽妙な声。

不思議にしん、と鈴の音のよつて身体に声が満ちる。

立ち上がり、声の方向を見る。

立っていたのは、黒ずくめの男だった。

真っ黒なコートで柳のよつな細い長身をすっぽり覆い、ブロンドのパーマがかつた長髪にシルクハットを被り、ゴーグルのような丸レンズのサングラスの下の端整な顔には常に軽い笑みが浮かんでいた。

「また会つたね。少年」

男が地獄に持つて来たのは妙な程の穏やかさだった。

地獄の濁つた空氣を払い、爽快な野原にいるように、男は平然と立っていた。

「嘆いても意味は無いよ」

騒然とした空氣を鎮めるような雰囲気を纏つて、歩み寄る。

「卑下してはいけない。悲観してもいけない。これはあるべきにして神が行つた“選定”だつたんだ」

腕を案山子のように大きく広げ、唄つ。

「そう、神は紡ぐのは苛酷な棘の運命。
それを人に纏わせては死ぬか生きるかの振るいにかけ、たつた一粒の砂金を探す。

ただの砂は編み目から落ち、落選する　なんとも笑える話じやないか。

平等を唱える筈の神が、その時点での世界に差別を作つてしまつたんだから

嗚呼、なんて矛盾！

なんて混沌！

我らが救いを乞つて来た神は人の作りし偶像なのか！
落選者を救う為の方便でしかないのか！

だが、それは違う。

神は存在する。

それは何故か？

逆に考えて見よう。

神がいるとして、欲したのは砂金じゃ無くて大地を創るための砂だとしたら？

自分を崇める弱い子羊だとしたら？

神は、自分の存在を確かにするために、わざと“選定”と言つシステムを作り、自らの手で、落選者を作っていたら？

神は確かに存在する。

矛盾を抱え、歪んだシステムの中で人の死や生を操り、自分を最高位の存在だと、醜く酔いしれる。

子羊達はそんな神に騙され、心酔し、ヒロ崇めさせる愚かな道化の役を

当てられた。

だが　君は違う

大袈裟に手を振り、言葉を身体で表現する。

まるでオペラのように語られる唄に、釘付けになる。

「君は牙を持つ権利がある故に、神の律から外された。君は世界にその才覚を与えられたんだ。神にその牙を向け、世界の自由を手に入れる為に。神に爪を立てるもの。まさに……」

悪魔。

神に地獄に墮とされ、這い上がつて来た反逆者。

不文律達の英雄。

歪んだ聖を犯す者。

「少年よ。今から君に選択をして貰う」

男の懐から現れる一冊の本。

B4大の大きさを持つ、ハードカバー装丁の本だった。

何より目を引いたのはその表紙。そこにはタイトルを押しのけ描かれる、縁に包まれ、慈しまれる銀色の少女の姿。

絵の中から飛び出して來るのであらば、幻想的で神秘性を孕んだ精緻な神象を思わせる美貌に、誰もが頭を垂れるであろうような美しいだつた。

少年は一時それに魅入られて、死の淵である事を忘れ頭を上げ、目を丸くして見入つた。

「これはパスポートだ」

男はしゃがみ込み、本の少女を良く見せるようにして語りかける。

「コレは君を人の境界から外す物だ。

コレを手に取れば、君は人以上になれる。

コレを手に取れば、君は人では背負いきれない十字架を背負う。

コレを手に取れば、君は今を生きられる。

コレを手に取れば、深き更なる苦界の未来に墮ちる」

そつと、男は少年に耳打ちする。

「「コレを手に取れば、母さんの所に行ける」

少年の中で電撃が走つた。

少年にそれ以上の言葉は入らなかつた。

少年は血に濡れた小さな手を伸ばし、男が持つ本を求める。

「……」

ほとんど痺れて冷たくなつた手。それこそ少年が動かせる最後の器官。

地に這いつづく芋虫のよつた姿に恥も外聞も存在しない。

常に自分の傍らに存在した母の柔らかな面影。

それだけが少年の脳裏を描き、少年を命を燃やす。

腕を引いたりひざばかりに腕を伸ばす。

「　おめでとう」

少年の血まみれの指が本の少女に触れる。

本が光り輝いて少年を包む。

それは正に、神の子の受胎を聖母^{マリア}に宣告する天使^{ガブリエル}のよつて

「少年、君は選ばれたんだ」

「ううして、俺は神に嫌われた。

「さあ、幼き少年は神が紡いだ運命を脱ぎ捨て、代わりに悲劇と苛
酷な生き方をその背中に焼き付けた。
世界は少年にどんな宿命^{ステージ}を用意するのか

少年はどうにして乗り越えるのか。

それとも、世界が揺さぶる荒波に飲まれるのか。

え？ その前に私は誰かと？

私は……“宣告の天使”であり、幕間に踊る道化でもある存在。

そろそろ開幕のお時間です。

長らく御客様には、私達の演じるドラマにお付き合ってお願いします。

それでは、皆様方、存分にお楽しみあれ

一章・Act・1(前書き)

ところがで田常纏です。

そして、その少年は今

*

きしづつ、と留め具を静かに軋ませドアが開く。

田標は築く様子なく、ぐりすりと眠っている。

侵入者は薄暗く、しんみりとした部屋に一步を踏み出す。

一步。

また一步。

慎重な足取りで、足音をたてず、「ゆづくづく」と田標の上に近づく。

侵入者の両手には鈍く光る獲物が一つ。左手には円盤状の鈍器、右手には先にカツプのついたスティック、両手にしっかりと握っている。

最後の一歩を踏み、田標の前に立つ。

田標の顔を覗き、寝息を發でているのを確認して、ニヤリと薄く笑う。

そのまま両手を上げ、獲物を振り上げ

「起きるわー ッ！朝だぞー ッー！」

両手のフライパンとお玉をけたたましく鳴らした。

／＼＼＼＼

カンカンカンカンカンぶつかり合いつフライパンとお玉の不協和音がオレの耳の中でつんざき、重い臉を薄く上げる。

最初に目に入ったのは、天井をバックに、少年じみた笑みを顔に張り付けた長い髪をアップスタイルで結い上げた少女の顔。

鼻筋が通った中性的な顔立ちとそれとは少し対照的なキリッ、とした目。

子供のよつた無邪気さの中に、鋭い凛々しさで田を引かせる風貌。

普通に見れば活発系の美少女、といった印象だが、オレにはこの活発さは局地災害に等しかった。

不協和音で頭がおかしくならないうちに布団を押し退け身体を起こす。

ダルい。頭がぐちゃぐちゃしてるとんび。

「おおおー！ やく起きたか！」

手を止めて公害狂想曲終了。

ねむぼつたく開いた目で田の前の騒音ベートーベンをじとりと睨む。

「……も、うひょ、とフレッシュかつソフトな起^くし方は無いんか」

生意氣にも高いでつぱつのある胸を反らして“わざわざ”的部分を強調して言ひ。

実際毎朝目覚まし時計をセットしているのだが、目覚ましが鳴る前にソレ以上に早く起きて来るのが光姉様その人なのだ。

突如、枕元がジリジリと鳴る。

今頃になつて喧しく鳴る四角いプラスチックの目覚まし時計。

そんな寝坊助さんにポチリと上のボタンを押して黙らせる。

「……ただでさえ、昨日は突然の仕事だつたのに」

「ん？」

「なんでもないっての」

「そ・ん・な・こ・と・よ・りつ！ ホーラホラホラ、早く起きて私の朝ごはんをつくりましょー」

窓のカーテンを開け、朝日の陽光を部屋に入れながらオレに笑いかけた。

快活な笑顔だが、オレにはムカつく笑顔だ。

瞼を擦つて橢円形のシルバーフレームの眼鏡を掛ける。

布団から足を出して床に付け、起床した。

（――）

朝六時。

光姉を部屋から追い出し、学校の制服に着替える。

起きてすぐに制服を着るのは、眠くとも一度寝しないためだ。

顔を洗つて歯磨きを済ます。

オレは常に自分のリズムを大切にする質だ。リズムは人生を円滑に運ぶ。

リビングに行くと、テーブルで叔父が新聞を広げ、紙面を見詰める。長い髪をくくり、極度の瘦せ型に少し猫背気味の脊、持病持ちのようなく不健康な印象が見受けれるがこれは生まれつきらしく、大病を患っているとか、そういうのは全く無い。

そんな風貌で、名前は杣木春樹ハルキといつ。

「おはよっ、遠夜君」

新聞を下げて遠夜を見る。

「叔父貴……起きてたんだつたら光姉の蛮行を止めてくれよ

「私も今しがた、光君の鐘の音で起きてきた次第でね。私の部屋の場合、遠夜君の部屋からだと鐘の音が若干緩和されてけりょうじいいくらじになるんですよ」

「そりやまた棚ぼたな事で……」

オレは、納得のいかないようすに眉をひそめた。

台所に向かい、早速家族五人分の朝食の支度をする。

朝飯と昼食はオレの担当。母はない。死んでいない訳でなく、ただ単にとある事情で家にいないだけの話だ。

杣木家では一番上の姉が家事全般を取り仕切っている。

オレの病弱さを心配して、一番上の姉が朝も取り仕切ると言うが、低血圧の姉貴に朝の台所を任せると事ほど、危険な事は無い。

寝ぼけ眼の姉貴が握っていた出刃包丁がいきなり出て来た黒光りする生きた化石目掛けて襟足を通過した時点でそう直感した。つーか、Gを始末すんのに調理器具を使うな。

「……」

ふと、台所に吊るされた鏡を見る。

そこには、線の細い、中性的な顔立ちの少年がいた。

シャープな顎と田鼻立ち、艶のある顎までのセミロングの黒髪、切れ長の目とその上に橢円形の眼鏡が掛けられている。

我ながら、女気が強い顔立ちだと心中で嘆く。

自分以外の姉弟が女ばかりな所から家は母親の血が濃いのだ。オレはそう考える。

Hプロンを着けて、食材を取りだすと冷蔵庫に目を向けると、一

枚のメモが冷蔵庫の戸にマグネットで止められていた。

『焼き肉定食一丁！ b y麗しの姉 光？』

「……」

無視して鮭の切り身を取り出す。

「つておおおいつ！」

いきなり暴れん坊お姉様が階段を駆け降り、途中で思い切りジャンプして、がに股で襲来。

着地の衝撃で足が痺れたらしく、膝を抱えて踞る。

「光君。階段は静かに降りなさい」

「うー……」

パツと立ち上がり復活する光姉。

「そんな事より貴様、ソコのメモに焼き肉定食一丁って書いてあるだろ」

ビシリ、と冷蔵庫のメモに指差す。それに目を向けて確認。

「確かに」

「確かに、じゃない！何故お前は牛の肉ではなく魚類を出すー！」

「朝から焼き肉なんてキツいだけだろ」

「キサマの感想など、それこそどうでもいい。」

「何処まで暴君？」

腰を折り曲げてテーブルに身を乗り上げ、ずびしと指を座す。

「どうするんだ！朝は肉だと期待して早起きしたこの行き場の無い活力を…夢に破れたこの絶望を…一度寝しようと眠気など吹っ飛んでしまったぞどうしてくれる…」

「知った事か」

「はう……」

抗議を軽くはね除けられ、身を縮込ませる。オレはそれを冷めた目で見詰めた。

「春樹叔父さん…」

「私はあまり肉は食べない主義ですか」

「あつ……」

「いいからおとなしく待つてろ」

「……」

うー、と唸りながらオレをにらみ、黙り込む。

少し間を置いて、テーブルを回り込んでオレの皿の前に立ち

「バカっ！」

と、背伸びして手を皿一杯上げ、べちり、と手刀を頭頂に食らわせる。

そしてすぐにテーブルを周り、自分の席に座つて頭を伏せて頃垂れる。

「可愛いものじゃないですか」

無責任に叔父貴が言ひ。

鍋に向き直り、出汁汁にお玉で掬つた味噌を溶ぐ。

(……やれやれ)

手間の掛かる姉貴だ。そう心中で呟きながら、オレは溜め息混じりに調理に集中する。~~~~

「んにゅう……」

手の甲で皿を擦りながらパジャマ姿の少女が階段から降りてくる。

自分の身長一つ半低く線の細い、か弱げな雰囲気が浮きだつ。緩いウエーブのかかった髪を一房に纏めた、固い表情の田立つ美少女だが、瞼が重たげに下がり気味だ。

秕木美星、オレの妹で秕木家の末娘である。

「何だ、夜更かしか？美星」

……一々五月蠅いのです。兄様」

じと半開きの田で見つめてくる。

「それと朝はおせむりが常識です。もう一回やり直しです」

「ハイハイ、おはよう」

「それで良いのです」

言い終わると、満足した顔で洗面所に向かう。

ジャバジャバと水が跳ねる音が聞こえる中、台所でオレは下茹えをした鮭を口に並べる。

「あーうー……」

テーブルに突つ伏す光姉。

未だに『愁傷の様子』。

「叔父様、コレどうかしたのですか？」

実の姉をコレ扱いしながら美星が戻り、テーブルのイスに座る。

「いつも事ですよ」

「……美星よ。もしお前が妹属性の萌えキャラだと言つなら私を慰めひ」

「……突發的過ぎでよくわかりません」

「意味がわからぬか。クツフフフフ……ならば教えてやる」

ゆらりと奇妙なモーションで大袈裟に起き上がる。

そのまま寝てりやあ良いものを。

「美星よ。今の君のフォルムを見てみたまえ」

イスから立ち上がり、押し付ける様に美星に指を指す光。

ウーラーのツインテール。

少しブカブカのパジャマ。

抑制されたような目。

「君はツインテール、おとなしつ娘、そして妹と言う二種の神器を持つている。喜べ、源義経でさえ集められなかつた二種の神器だぞ」

いや、ソレとコレとはレベルがかなり違つよつた気が。

「そして、妹属性には必ず持つているスキルがある。それは――」

光の目付きが厳しくなる。

「 ブラコン、もしくはシスコンだ」

「……？」

ハテナマークが出るかのように首を傾げる美星。

眠たげなので表情はあまり変わらないが。

「 そう、愛でられるキャラとはその本人が愛でられるような愛情表現があつてこそ愛だ！ いわばギブアンドテイク、愛とは等価交換故の鍊金術の産物なのだよ！ それが、世界の真実だと、そう思つていた……」

「すでに過去形じゃねーか。 そう思つていたって」

てゆーか、恋もしない奴が愛のなんとやらをヒル〇ック弟風に語るな。

そんなコンビニのレジ的な愛なんて俺は願い下げだ。

が、目の前の演説中お姉様は聞かずこなごと脊髄反射的六ボコ自己理論を熱弁する。

「つまりだ。その理論に乗っ取り、お前は可愛がっていた弟に裏切られ、虐待され、傷心中のお姉様を慰める義務がある」

「 暴行を受けたのはオレの方なんだけど」

あのチョップ意外と痛かったぞ。

だが、光姉はそんなのはやつぱ無視。

「さあ、今までの私がお前に捧げた愛の代価として、この傷付いた心を癒して貰おうか。さあ、払つもんチャツチャと払つてもうたろかい」

ざーとらしく舌を巻いて愛の（？）脅迫。

そんな唯我独尊お姉様に美星は

「謹んでお断りします」

「あふあつー？」

抑揚の無い目で姉の恐喝をはねのける美星。

「人間関係を簡略化するなど、愚の骨頂なのです」

お、大人な発言。

我が妹も知らぬ間に大き……。

「ギブ＆テイクなど、所詮はプラスマイナスゼロではありませんか。人間ならプラスを追求すべきです。思考を巡らせ、奸計に嵌め、全てをもぎ取る。今はそのぐらいの心掛けが必要な時代なのです」
いつの間にかいやな大人に。

「光姉様。あなたのソレは古い思考です」

「なつ！？」

「時代を鑑みていない、閉鎖的で退廃的な考え方です」

「あひつ！」

「そのような価値観では時代を切り抜けられません。時代に取り残されるのがオチです。極端な脳が入ったその頭ごと取り替えることをオススメします」

「」

丁寧にズバズバと言われ、後ずさる光姉。そして……

遂には大泣きして、俺の足の脛にしがみついた

完全に論破した美星は満足けな表情で胸を張っている。つか小学生に論破されんなよ高校生。

「美星があ、
美星がいじめるう～～～～～う」

A vertical dotted line with a circle at the bottom.

さて、弁当を作らなきや。

{ } { }

只今七時丁度。

朝食も作つた。

弁当も我ながら完璧。

光姉も美星も起きた。

わて、問題はこれから。

階段を上がり、すぐ右手前の部屋。

ドアを開けて薄暗い部屋に入る。

「……！」

思わず息を呑む。

「ん……」

カーテンから零れる陽光が薄く照らすベッドの上には、タオルケットをかけてぐっすりと眠る美女。

やや寝相は悪いが、その寝姿は童話の眠り姫に例えても遜色は無い。

ピンクのネグリジェに身を包み、扇状に広がった亞麻色のふわりとした長い髪の上に背と腰に乗せて、纖細な肌で構成された、気品のある顔立ちが、無防備過ぎる寝顔を見せる。

薄いベール越しに見える、緩やかな曲線の引き締まった肢体はとても艶めかしく見え、普段の清楚さからは想像出来ない官能的な面を感じざるを得ない。

その上には纖細な白から、ほんのリピンクに上気した胸元。それの見事な谷間に視線を釘付けにされる。

今までに色気に満ち溢れた眠り姫がここに降臨した。

「 ゆ、 優月姉、 そろそろ起れ…… て」

オレは頭を思い切り横に振つて雑念を払う。 欲望を必死に抑えながら、眠り姫に恐る恐る手を伸ばす。

「んん……」

「 ヒギイツー？」

寝返りを打たれ、仰向けの胸を指す指先に、揺れるたわわな双子の丘、イヤ、既に山の領域に至っているモノが突如出現。

そり、後少し手を伸ばせば、あのマシュマロ連山雪景色が　！

つて、ちゅつとまて。

いやいやいやいやいや、落ち着けオレ。幾ら思春期真っ盛りなりビードを抱えたオレが、こんな危険なモノを目の前にしたからって、相手は実の姉だぞ。

明らかにヤバいだろ確実に！

と、言いつつも、田線が行つてしまつ自分が悲しい。

つか、オレはドンだけ自分の実姉を口く見てんだ？

読者狂の悪癖にオレは頭を痛める。

ええい、まどろっこしい。サーツと起にしてサーツと下に行けばいいんだ。暴れるなオレの心の獣！

オレは湧き出る醜い欲望を抑えながら恐る恐る優月姉の肩に手を掛けた。

「優月姉！早く起きてく

その瞬間、目の前に蒼空が広がった。

雲一つ無い青一色に、小鳥達が生き生きと翼を羽ばたかせていた。

どうか オレ、鳥になつたんだ。

あの大空を翔ける、人間の誰しもが夢見た、空を飛ぶための形に。

待つて来れ、オレも連れてつてくれ

ドシン、と鈍い音が響いた。

「んん……？」

ゆつぐりと瞼を開け、細い体を起こして伸びをする。

枇木優月。

枇木家姉弟の長女で一番上の姉だ。

「……？」

振り返ると、カーテンを開けたわけでもないのに、窓から陽光が目一杯入り込んでいた。

いや、それどころか窓ガラスすら無い。

カーテンは風ではためき、窓ガラスは叩き割られて散々に破片が散つていた。

「何これ……？」

ベッドから足を下ろして破片を避けながら窓に向い、窓から外を覗き込む。

日の光に瞼を半開きにしながら周囲を見てみる。

やしトを覗くもん

「遠夜つ！？」

そこには、逆さまになつて頭が完全に地面に刺さつた秕木遠夜の体
が生えていた。

「ちよ、ちよつと大変！遠夜が！遠夜があ~~~~~つ！！」

秕木優月。

才色兼備で完璧で、寝相で人も殺れる秕木家長女。

*

「本当にいいめんなさいね。遠夜」

「もういいよ、優月姉。いつもの事だし。」

半分、洒落になんないけど。

だけど、悪いのは姉さんじやない。悪いのはいつも事なのに、揺れる山に負けて、油断したオレが悪いんだ。

「大丈夫？本当にもう痛くない？」

優月姉が心配そうに、俺の顔を覗き込む。

じつ心配されて、悪い気はしない。つてゆうか、優月姉だと結構嬉

しい。

「大じょ……」

大丈夫と続けて言おうとした瞬間、下を向くと、リボンを結ぶ前の制服の胸元から微かに覗ける小山の麓の谷間。

微かに覗けるそれはおおっぴらに見えるのは別の方向性で何か、その……。

つて、駄目だ駄目だ。さつき痛い目にあつたばかりだな。

「……」

と、美星が物言いたげな顔で見ているのに気付く。

何やひ田つきが少しじとつと厳しい。

「……美星。どうかしたか？」

「兄様。田つきがエロいです」

「お前、妙な言葉のレパートリーが豊富だな」

「そんな事はどうだつていいのです。兄様はアレですか？姉を姉と思えずには異性としか感じ取れない異常性癖者ですか？それとも危険な恋愛に手を出して溺れるマニアックな趣味の方ですか？どの道あなたは変態です」

「美星、学校で国語を教えてくれる先生の名を教えてくれ。今すぐ地

獄巡りが出来るよつにさせて来るから

そいつが源泉かどうか知らんが、子供に正しい言葉を教えるべき国語教師の庇護の元にありながら、教師がちゃんと悪い言葉と良い言葉の分別を教えないのは職務怠慢だと思つ。

「 私だつて、後五年位すれば、恐らくは……」

ぼそりとした呟き。

「 へ？」

「 何でもありません」

「 お、 おおお……」

…… 一体何だつてんだ?

「 とりあえず、 オレは大……」

「 大丈夫だつて。 我らが弟は鍛えられてるんだから」

このアマア。

「 光、 そんな風に遠夜をいじめないで」

「 へーい」

弟への労いを知らない光姉は優月姉に軽く叱られ、 だが反省の色を見せない光姉。

おつと、『「飯並べなきや。』

「あ、お魚。やつぱり朝はお魚よね。DHAが豊富で、軽く食べられて朝はやつぱり『「飯と味噌汁とセツトでこれよね。流石遠夜、私の弟』

並べられたメニューを見て、手を合わせてホワホワとした柔らかな笑顔で褒める優月姉。

やつぱりこんな風に喜んで食べててくれる人が居ると料理も楽しく思える。

光姉が怨みがましい目で優月姉を見るが無視する。

これが一般論だ。

「まつたく、そんなんでパクパク食べるから、最近胸だけじゃなくて、胴回りも豊かになるんだよ」

ビキイ、

と何か硬いものにヒビが入る音がする。

覗いて見るとあら不思議。

優月姉の指が木製のテーブルに食い込んでいるのだ。

優月姉の周りの空気が液体窒素をかけたように一致に温度が低下する。

並々ならぬ空氣の流れ。

感じるより先に、身体がソレを感じる。

光姉も事を察知してハツ、と口をつぐむ。

だが時既に遅し。

「……光」

「ハイイイツ！」

か細い声で妹の名を呼ぶ。

だが、全てを圧倒する何かが秘められている。

大量の冷や汗をかき、青ざめてびくつく光姉。

「人は誰しもね、触れてはいけない地雷を持つてるものなのよ」

にこやかな笑顔を光姉に見せる優月姉。

だけど目が全然笑つてない。

ヤバい、オレも直視出来ない。

美星も叔父貴も空氣に耐えきれずにあさつての方向に顔を向ける。

「……すいません」

掠れた声で謝る光姉。

もう、それ以上をする気力は無いだろつ。

「やう、ならいいわ」

戦慄の後の朗らかな笑顔が、張りつめた空気を緩ませる。

助かつた。マジで。

だけど、標的となつた光姉は未だに後遺症が。

「それじゃいただきましょうか」

「それじゃいただきますの前に、御祈りを」

「いただきます」

そう言つて、優月姉は比較的豊かな胸の前で手を合わせるのを狙い
すましたように朝飯を始める。

「ちよ、ちよと遠夜」

「ゴメン、食事の前は必ずいただきまことにしなないとオレに神託が
くだつたんだ」

「ヤバいまでの事?」

姉達はカトリック系の教徒だ。

食事前の御祈りは毎度の事なのだが……オレには少し憂鬱だ。

「 ロックだねえ…… 我が弟、反抗期かい？ 湘南純愛族張りに」と、悪戯な笑みでオレの肩に腕をかける光姉。つか、なぜ鬼塚英吉の中学校時代話が出て来る。

「でもそんなんじゃ反骨の遠夜君にはなれないぜ？ そんな詰めの甘いようじゅぱシリルートまつしぐらだ。ホンモノの漢に迂回したいならやつぱり、ここははつきりと言つてやるべきだ。ほら、勇気を出せ、漢を見せろ、踏み越えよつ！… ほら、姉貴に牝ブ」

風切り音。

ヒュン、と軽い音と反比例した威力で優月姉が投げはなった箸が光姉の眼下を通過する。

光姉の前髪をくすぐつて過ぎ去ったそれは、ステンレス製の台所に綺麗に突き刺さつた。

「 光、遠夜に妙な事吹き込まないで」

「…………はい」

しばしふリーズしてか細い声で答える。

「遠夜」と、優月姉。

「私はね、ただ　」

「所で昨日、何で三人で夜更かししてたんだ？」

瞬間。

凍り付いた様に一人の姉と妹は静まり返る。

しばし沈黙。

「叔父貴、新聞読みながら」飯食べない

「それもそうですね」

新聞をたたみ、いたつてマイペースに茶碗を持つ春樹叔父さん。

「し、知つてたの……」

「まあね」

凍結から一番始めに解凍したのは優月姉。

もう冷や汗ダラッダラ。

「バイトとは言え、夜なんだから程々にね」

「う、うん。わかったわ。大丈夫だから
「美星も、夜遅くまで起きてちゃ駄目だよ

「……ハイ」

「フツフツフツ……」

何故か、いきなり立ち上がる光姉。

「そんなに私達の事が知りたいか？妄想して煩惱ムンムンか？なら一ば、教えてしんぜよ。あれは昨日の晩だつた」

静まり返る満天の星空の下、平和に眠りに付こうとする
枇木姉妹の下に、タリラン銀河惑星連合軍の第一連合師団の宇宙戦
艦隊が我が家上空に飛来、突然の来訪者に驚く三姉妹に彼らは言つ
た。彼らは私達三姉妹を○エダイの戦士としてスカウトしにきたの
だった。こうして、三姉妹はアルザス帝国との宇宙戦争に巻き込ま
れて行く

「おかわりです」

「ハイハイ

差し出された茶碗に手を伸ばす。

「 って、聞けえ！」

テーブルを箸を持った手でバン、と勢いよく叩き抗議。

「貴様、人に話を聞いといて堂々と無視とはいひ根性だ。逆に見習
いたい」

「話を聞かせてとは一言も言つて無いがな」

てか、見習つんかい。

炊飯ジャーから小さな茶碗に白飯をしゃもじで盛り。

にしても嘘つく為とはいへ、酷いなオイ。

ジョージの乍作に失礼な。

「光姉」

「いきなり、ブッシュから棒になんだ？」

「使いにくくない？それ。まあ、それは置いといて……一つ、気づいた事がある」

一息。

「姉貴の口から吐き出される物は一酸化炭素と余分な酸素、そして聞くに耐えない言動と、ウヒヤホウ等の奇声だけだと呟つことだ」

「実の姉に対してソレかっ！」

光姉の箸の先がブスリと自分の眉間に刺さった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1821y/>

デイブレイカー～秕木家の事情～

2011年11月17日17時35分発行